# クァルテット・グラーツィア
# Quartetto Grazia

## 紀尾井町サロンコンサート
## Kioicho Salon Cocert

2023年2月4日(土)

紀尾井町サロンホール

# Program

## W. A. モーツァルト：ディヴェルティメント ニ長調 K.136

W. A. Mozart : Divertimento in D Major, K.136

第1楽章　アレグロ
第2楽章　アンダンテ
第3楽章　プレスト

1. Allegro
2. Andante
3. Presto

## F. J. ハイドン：弦楽四重奏曲第75番 ト長調 作品76-1

F. J. Haydn : String Quartet No.75 in G Major, Op.76-1

第1楽章　アレグロ・コン・スピリート
第2楽章　アダージョ・ソステヌート
第3楽章　メヌエット：プレスト - トリオ
第4楽章　フィナーレ：アレグロ・マ・ノン・トロッポ

1. Allegro con spirito
2. Adagio sostenuto
3. Menuet: Presto - Trio
4. Finale: Allegro ma non troppo

## L. v. ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第10番 変ホ長調 作品74《ハープ》

L. v. Beethoven : String Quartet No.10 in E-flat Major, Op.74 "Harp"

第1楽章　ポコ・アダージョ - アレグロ
第2楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ
第3楽章　プレスト - ピウ・プレスト・クアジ・プレスティッシモ
第4楽章　アレグレット・コン・ヴァリアツィオーニ

1. Poco adagio - Allegro
2. Adagio ma non troppo
3. Presto - Piu presto quasi prestissimo
4. Allegretto con variazioni

Quartetto Grazia

## クァルテット・グラーツィア

2002年よりマタイ受難曲、ミサ、レクイエムなど宗教曲の演奏を主要な活動とした“フィルハーモニカ・トウキョウ”の各首席奏者として活動を共に始め、月に一回さまざまな編成による室内楽演奏会「テプコ銀座館・おもしろ音楽館」の公演も重ねる。2006年より弦楽四重奏団として活動を開始。2008年に東京文化会館小ホール・第1回定期演奏会では音楽の友6月号にて素晴らしい評を得ている。

## 相原千興 Chioki Aihara（ヴァイオリン）

第42回ＮＨＫ毎日新聞主催学生音楽コンクールヴァイオリン部門東京大会入選。第2回江藤俊哉ヴァイオリンコンクール入賞。第8回日本モーツァルト音楽コンクールヴァイオリン部門入賞。ザルツブルグ国際モーツァルトコンクール派遣選考会にて(第１回日本モーツァルト音楽大賞選考演奏会)ヴァイオリン部門優秀賞を受賞。クライネス・コンツェルトハウス欧州公演にてヴィンタートゥール(スイス)、ザルツブルグにて演奏。名古屋フィルハーモニー交響楽団、東京ニューシティー室内管弦楽団と共演。桐朋学園大学音楽学部演奏学科（弦）卒業。江藤俊哉氏に師事。国際音楽祭、マスターコース等を通し国内外の教授、演奏家、指揮者方からも教えを受ける。現在、東京フォルトゥーナ室内管弦楽団のコンサートマスター、クァルテット・グラーツィアの第一ヴァイオリンを務める。

## 春日井恵 Megumi Kasugai（ヴァイオリン）

名古屋市立菊里高等学校音楽科、東京藝術大学音楽学部を卒業後、スイスのカヤレイ・ヴァイオリン・アカデミーに3年間留学し2018年6月ディプロマを取得。2008年『コンチェルトの夕べ』にて名古屋芸術大学オーケストラと、2009年『こまき秋の音楽祭』にて中部フィルハーモニー交響楽団と共演。2014年京都・国際音楽学生フェスティバル、2015年読売交響楽団欧州ツアーに参加。第4回ヴァスコ・アバジエフ国際ヴァイオリンコンペティション第3位。2021年4月より愛知室内オーケストラ団員。

これまでに村田宜子、森下陽子、澤和樹、エスター・ペレーニ、漆原朝子、ハビブ・カヤレイの各氏に師事。

## 藤原歌花 Utaka Fujiwara（ヴィオラ）

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、同大学を卒業。芸大フィルハーモニア、兵庫芸術文化センター管弦楽団アソシエイトメンバーを経て東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程を修了。現在は舞台音楽、オーケストラ、室内楽、現代音楽、ライブ、スタジオワーク等活動は多岐に渡る。インストバンド「Anoice」のメンバーとして6枚のアルバムCDをリリース。アメリカの音楽レビューサイトThe Silent Balletやa closer listenによる「2019年トップ10アルバム」に選出され、世界15ヶ国、そして日本のApple Music/iTunes Storeでストリーミング数、及びダウンロード数で1位、またはトップ10を記録した。

これまでに菅沼準二、小野富士、百武由紀、故川崎和憲、岡田伸夫の各師に師事。

## 寺井創 Hajime Terai（チェロ ）

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部に入学。在学中、ウィーン・プラハ・ブダペスト合同の国際室内楽講習会に大学から派遣される。藝大室内楽定期演奏会に毎年出場。F・バルトロメイ氏選抜による室内楽公開講座に参加。サイトウキネン「若い人のための室内楽講座」、小澤征爾音楽塾オペラに参加。大学卒業試験においてアカンサス賞、同声会賞を受賞。

現在、東京藝術大学音楽学部非常勤講師、藝大フィルハーモニア団員。

これまでに、毛利伯郎、北本秀樹、河野文昭の各師に師事。

# Program note

## モーツァルト(1756-1791)：ディベルティメント　ニ長調　Kv.136

1772年の初め、ザルツブルグにおける作品でKv.137とKv.138とは同時に作曲された三つ子の作品の一つである。これら草稿は同じ五線紙に続けて一気に書き下ろされている。
3曲ともそれぞれ3楽章で、ディヴェルティメントとしては異例でメヌエットは全く含まれていない。そういうわけでこの作品はことのほか規模は小さいが、天才モーツァルトのニ長調に多く見られる若さと明るさに満ちた、最も広く知られた名曲である。中でもこの第一楽章の輝かしさはたとえようもない。第二楽章は伸びやかな主題を歌い上げる緩徐楽章。第3楽章プレストは軽快な終曲で展開部は短いながら対位法的な技法で変化がついている。

## ハイドン(1732-1809)：弦楽四重奏曲　第75番　ト長調　Op.76-1

弦楽四重奏曲というジャンルはハイドン一人によって開拓され、確立されたと言っても過言ではない。生涯で68曲もの弦楽四重奏曲が書かれ、それらはこのジャンルの変遷の歴史を物語っている。6曲セットの作品76は、1797年に作曲され、ヨーゼフ・エルデーディ伯爵に献呈された。すでに104曲もの交響曲を書き終えているハイドン晩年の傑作。

第1楽章　アレグロ・コン・スピリート　ト長調　2分の2拍子　ソナタ形式。
3つの和音連打後、第1主題がチェロから奏され各楽器が順番に模倣する。厳格な第1主題に対して、動機素材は共通ながらも軽やかな歌の第2主題が対置されている。展開部では下降音階による対旋律も加わり、動機が展開され、ドミナントのオルゲルプンクトを経て、再現部に移る。再現部に入っても依然として下降音階による対旋律が残されていたり、全曲を通してハイドンのウィットは至る所にちりばめられている。簡潔に楽章は閉じられる。

第2楽章　アダージョ・ソステヌート　ハ長調　4分の2拍子　自由な形式。
4声体による「静」的な楽想と、小さなドラマを孕んだ「動」的な楽想が交互に計4回、形を変えながら奏される。

第3楽章　メヌエット　プレスト（ト長調）ートリオ（ト長調）　4分の3拍子　軽快なスケルツォ風メヌエット。
ト長調のままのトリオでは、ピチカートによる和音の上を第1ヴァイオリンが装飾的に動き回る。

第4楽章　フィナーレ　アレグロ・マ・ノン・トロッポ　ト短調　2分の2拍子　単一主題によるソナタ形式。
予期していなかったト短調に始まる。ソナタ形式ではあるが、その後の展開はお楽しみ。もっぱら冒頭6小節間に詰められたわずかな動機素材を展開させ、ここまでの心弾むフィナーレを書くハイドンはさすがである。

## ベートーヴェン(1770-1827)：
## 弦楽四重奏曲　第10番　変ホ長調　Op.74「ハープ」

1806年の壮大な野心作《ラズモフスキー》セットから3年を経てベートーヴェンは再び弦楽四重奏曲にとりかかった。その間《第5交響曲》、《第6交響曲》、《ピアノ協奏曲第5番》などが作曲されベートーヴェン中期の創作活動の頂点を形成している。1809年秋に作曲されたこの作品は、《ラズモフスキー》の延長線上にありながらもそれらとは相異なる世界を示している。緻密で手の込んだ複雑な論理的書法からは距離を置かれ、より自由で明快な楽奏と構成を備えているのが特徴である。それはどんどん外的構造物を削ぎ落とすことにより内的精神の昂揚を獲得していくベートーヴェン後期の書法に繋がるものであるとも言える。

第1楽章　ポコ・アダージョ(2分の2拍子)―アレグロ(4分の4拍子)　変ホ長調　序奏付きソナタ形式。
変ホ長調の主和音で始まるが、すぐに逸脱し、調の終着点を探し求めるかのような不穏な序奏が展開される。全曲を通してモットーとしての動機素材が内包されている。抜け出した第1主題は第1ヴァイオリンからヴィオラに受け継がれて楽想を成す。第1主題後に現われるピチカート楽句や展開部、コーダでのピチカート楽句が印象深くハープのような響きの効果を持つことからこの作品に「ハープ」という愛称がついている。第2主題は流麗な16分音符を伴ったパッセージ。展開部では主に第1主題が展開され、最後は再びピチカートが現われる。厳格な再現を経てコーダでは第2展開部のごとく第1ヴァイオリンが華やかに分散和音で駆け巡る。ここでもピチカートは印象的。

第2楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ　変イ長調　8分の3拍子　A-B-A-C-A-(B)-Codaのロンド形式。
魅力的な旋律が次々に登場する。Aのロンド主題は出てくる毎に華やかに変奏され、第4楽章の変奏形式との関連を準備している。

第3楽章　プレスト　ハ短調　4分の3拍子　S(スケルツォ)-T(トリオ)-S-T-S-Codaという《第7交響曲》と同様の5部分構造。
力強い、緊迫感に満ちた楽章。タタタタンの「運命動機」が畳み掛けられる。トリオでは記譜上の一小節が倍の速さになるのだが、その効果はトリッキーで手に汗握る。最後は運命動機も弱体化していき静かに変ホ長調の属七の和音で半終止し、そのままattaccaで第4楽章に繋がる。

第4楽章　アレグレット・コン・ヴァリアツィオーニ　変ホ長調　4分の2拍子　変奏形式。
ベートーヴェンの書いた弦楽四重奏曲の中で唯一の変奏曲フィナーレ。単位は違うものの第3楽章と同じメトロノーム数字を与えていることからも、この楽章間の接続、関連に緻密な計算が見て取れる。主題と6つの緩急多彩な変奏とコーダからなる。コーダでは次第に加速していき最後はAllegroで曲が閉じられる。